

59 山本忠孝―北京における魯迅の主

治医―

泉 彪之助

山本医院（北京）院長山本忠孝（ただたか）は、中国の文豪魯迅の北京における主治医であった。

一九二六年三月十八日、北京で民衆のデモに執政段祺瑞の護衛兵が発砲し、四十七名の死者が出た。これが三・一八事件である。魯迅はデモに参加したが、後に逮捕状が出たと伝えられ、外国人が経営する病院のいくつかに難を避けた。その一つが山本医院である。これのみでなく、魯迅は山本医院に何年にもわたって受診し、また親戚や知人を紹介している。

山本忠孝の経歴は今まで知られていなかったが、演者はその生涯の概要を明らかにしたので報告する。

山本忠孝は、明治九年十一月医家の子として京都市に生

まれ、明治二十五年四月京都府立医学校入学、明治二十九年十月同校を卒業した。昭和七年四月二十九日、上海新公園（現在の虹口公園）で重光公使、白川大將らと共に爆弾を受けて死去した上海居留民団長河端貞次は京都府立医学校における同級生である。

山本忠孝は、明治二十九年十一月医師開業試験免許を受けた後、京都府立療病院神経精神科に就職したが、翌年病氣のため退職。しばらく生命保険会社の医師として働いた後、父のあとを継いで京都市左京区新駄屋町仁王門下ルで開業した。明治三十四年五月、木村田鶴と結婚。明治四十年よりドイツに留学し、ベルリン、ゲッティンゲン、ミュンヘン各大学に学んだ後、ビュルツブルク大学で「結核における凝集反応について」の論文でドクトル・メデイチーネの学位を得た。明治四十三年に帰国したが、同年中国に旅行し、たまたま北京で患者を診察したことから、翌四十四年北京で開業した。最初東城八宝胡同で開業し、大正八年西城旧刑部街（現復興路）に移転した。大正二年―三年、同一年にもドイツ留学。大正十二年―十三年には、米国ジョンス・ホプキンス大学へ留学した。大正十五年、「好中球

移動の原因としての骨髄の微細構造」の論文で、母校で医学博士の学位を得た。その後昭和三年―四年にも渡欧している。

山本忠孝は昭和十一年還暦を機に帰国。太平洋戦争開戦後、別府に定住。昭和二十七年二月に没した。

魯迅は、一九二〇年から一九二六年にわたって山本医院に受診した。また、母魯瑞も山本医院で診察を受けた。次弟周作人、三弟周建人の妻羽太芳子、周建人の子周豊一、周鞠子は、山本医院に入院したことがある。

山本田鶴は生前、魯迅のことをたずねられて、「山本医院にみえていた」と淡々と話していたという。

『魯迅日記』によれば魯迅は、三・一八事件の後、三月二十九日に山本医院に行き、その後四月十五日にドイツ医院に移るまで、山本医院に滞在して、時々自宅に帰っていたようである。

北京市旧刑部街の山本医院は、太平洋戦争ごろ日本からの留学生寮となり、中華人民共和国成立後は、鉄道部の病院を経て現在は共同住宅となっている。

山本忠孝は、北京大学教授で中国共産党の創設者であっ

た李大釗と交流があったという説があるが、確認出来なかった。

(福井県立短期大学)